

## 日本語の生成及び言い替えと語彙関数

岡本 哲也

電気通信大学

## 1. 初めに

メリチュークは、「意味の演算」に基づく言い替えと言語学的言い替えを区別し、後者を、さらに、構文の変換を主とする *Syntactic paraphrase* と語彙要素の変換による *Lexical paraphrase* に区別した後、*Lexical paraphrase* を目的として、基本関数約40と合成関数から成る語彙関数を定義し、語彙要素変換とロール構造(格フレーム)変化に対応する構文変換とから成る言い替え規則を報告している。

筆者は、現在、日本語の生成と言い替えを対象とする研究を、学術論文の文と文章の構造解析、擬似日本語の定義、並びに「文章の書き方」への言語工学的対応の問題と関連して、進めている。

本稿において、メリチュークやアフレシアン<sup>2)</sup>のロシア語に関する研究結果に従い、日本語についてロールを明示する文に注目して、幾つかの語彙関数と言い替え規則を示す。

## 2. 語彙関数と言い替え規則

語彙関数 (*Lexical function, Lf*) を、本稿では、「多数の語彙要素の多様な慣用的表現に認められる意味関係<sup>1)</sup>」という制限を課さずに、広義に、語又は連語を一般、一対多に一対多に結びつける意味関係と定義する。

語彙関数  $Lf(X) = Y$  において、アргумент  $X$  が *predicative*、即ち、意味特徴 [+predicate] を持つ語彙要素である場合、 $X$  のロール(深層格)との関連や、関数の値  $Y$  の表層の義務的アクタント(従属成分)との関連を示す場合に、 $Lf$  にロール記号、又はロール番号を添える。

ロール番号は、*sub, obj, instr, result, content* などの記号、或はロールの名称を  $\langle \rangle$  で括って、例えば、 $\langle \text{始点} \rangle$ 、 $\langle \text{内容} \rangle$ 、 $\langle \text{行程} \rangle$  等とする。

ロール番号は、着目するロールが表層で文の主語、第一目的(直接目的)、第二目的(間接目的)、状況語或は修飾語として実現するとき、この順に1, 2, 3, 4以上とする。ロールの表層における構文上の義務性(述語が従属成分を支配する強さ)は番号の小さい程強いと見なす。なお、ロールの義務性は *predicative* の意味(語義)に直接依存するものとし、その表層での実現性及び構文上の義務性と区別する。普通、両者が一致する。後述するように、言い替え規則で指定するロール番号は殆どの場合3以下である。紛れなければ、番号でロールを担うアクタントも示し、両者を区別する場合は、 $i$  番目のロールとアクタントをそれぞれ  $R_i$ 、 $A_i$  で示す。添字  $i$  は *predicative* が指す「現実の一場面」全体に関連することを示す。

関数には、その値  $Y$  がアргумент  $X$  と *paradigmatic* に交替する型と、 $Y$  が  $X$  に *syntagmatic* に適合する型がある。基本関数40種の中で前者に属する関数は4種あり、残りはすべて後者に属する。

以下、交替型関数から、対義関数を除いて、同義 (*Syn*)、逆関係語 (*Conversive*)、<sup>コンバーシブ</sup>「場面」の典型的名称の品詞別派生 (*So, Vo, Ajo, Advr*) の関数を、他方、結合型関数からは、上位概念 (*Gener*)、アクタントの品詞別典型的名称 (*Si, Vi, Adj, Advr*)

, So(X)又はSi(X)と結合してXと同義又は擬似同義的連語を形成する動詞(Operation, Labor, Func)を導く関数を言い替え規則と共に示す。

言い替え, 或いは, 同義を, 本稿では, 広義に, 真の同義と並んで, 意味の同一部分が相違部分よりも少なくない擬似同義<sup>2)</sup>を含めて理解する。また規則は深い表層構造に関するものであり, 表層の文の最終的な形態, 特に用言或は体言に連なる形態や語順を定める規則は別の規則に属する。

## 2.1 Syn, Conv, Advと交替規則

同義:  $Syn(\text{明瞭な}) = \text{明瞭な}$   $Syn(\text{ソ連邦}) = \text{USSR}$   $Syn(\text{目標とす}) = \text{目指す}$   
 $Syn_{2-3}(\text{呼ぶ}) = \text{言う}$

最後の例は, 「~と呼ぶ」のR-ル1, 2, 3が1と2, 3とに分割されることを示す(規則例参照)。なお, 記号 $\subset, \supset, \cap$ を添えて意味の僅かな相違を示すことができる。

逆関係語:  $Conv_{21}(\text{勝つ}) = \text{負ける}$   $Conv_{21}(\text{負ける}) = \text{勝つ}$   $Conv_{321}(\text{売る}) = \text{買う}$   
 $Conv_{\alpha}(X) = Y$ は, XとYが同一の「場面」を指し, 同一のR-ル構造を持つが, 特定のR-ル番号の対が, 両者で逆転し, かつ両者の構文上の品詞が一致する場合に成立する。添字 $\alpha$ は, Xの第 $\alpha$ R-ルがYの表層の義務的な第 $\alpha$ 成分となる時,  $\alpha$ の第 $\alpha$ 行をこととする。例えば,  $Conv_{321}(\text{売る}_{123}) = \text{買う}_{321}$ に注意。

派生:  $So(\text{酸化す}) = So(\text{酸化的}) = So(\text{酸化的} =) = \text{酸化}$   $So(\text{入手す}) = \text{入手す}$   
 $So(\text{入手す})$ は,  $So \text{ Pred Adjo}$ , 形容詞に連綴の必要な言語の場合に注意)  
 $Adjo(\text{政治}) = \text{政治的}$   $Vo(\text{研究}) = \text{研究す}$   $Vo(\text{恐る}) = \text{恐る}$   $Vo(\text{吐き出す}) = \text{吐き出す}$

なお *Adv* の例は規則を参照。

交替型の規則を示す。矢印は従属成分から支配成分に向かう。矢印に添えた数字の意味は既に定義した。

- 規則 1  $X \Leftrightarrow Syn_{\alpha}(X)$   
 2  $X \Leftrightarrow Conv_{\alpha}(X)$   
 3  $X \Leftrightarrow A_i + Adv^i(X)$   $A_i: [\text{predicate}]$

例 1 (1) 温度の上昇<sub>1</sub>は明らか<sub>1</sub>に $X \Leftrightarrow$  温度の上昇は明瞭<sub>1</sub>に $(Syn(X))$

$\Leftrightarrow$  明らかに<sub>1</sub>に $(Adv^1(X))$ , 温度の上昇する<sub>1</sub>,

$\Leftrightarrow$  明らかに, 温度の上昇<sub>1</sub>が起る

(2) 私<sub>1</sub>は二の文<sub>2</sub>を同義文<sub>3</sub>と呼ぶ $X$

$\Leftrightarrow$  私<sub>1</sub>は二の文<sub>2</sub>は同義文<sub>3</sub>であると言う $(Syn_{2-3}(X))$  (規則5参照)

例 2 (1) 太郎<sub>1</sub>が本<sub>2</sub>を次郎<sub>3</sub>にやる $X \Leftrightarrow$  次郎<sub>3</sub>が本<sub>2</sub>を太郎<sub>1</sub>からもらう $(Conv_{321}(X))$

(2)  $A_1$ が $A_2$ をなぐる $X \Leftrightarrow A_2$ が $A_1$ になぐる $(Conv_{21})$

受身変形は規則的な *Conv* 変形と見なせる。

例 3 (1) ジョン<sub>1</sub>は決定<sub>2</sub>を謀る $X \Leftrightarrow$  ジョンは謀る<sub>2</sub> $(Adv^2(X))$  決定<sub>2</sub>する

$Adv^i(X)$ は, Xが副詞になり, かつ, Xの第 $i$ アクタントが主文となることを意味する。

## 2.2 Generと上位概念(類概念)を添える規則

規則 4(a)  $X \Leftrightarrow Gener(X) + X$

$$(b) X \Leftrightarrow \overbrace{\text{Gener}(X) + \text{Adjo}(X)}^4$$

$$(c) X \Leftrightarrow \overbrace{\text{Gener}(X) + \text{So}(X)}^4$$

例 (1)  $\Lambda = \text{シリ} \times$  について  $\Leftrightarrow$  抗生物質 ( $\text{Gener}(X)$ )  $\Lambda = \text{シリ} \times$  について

$$(b) \left\{ \begin{array}{l} \text{恐れ} \times \\ \text{悲しみ} \times \end{array} \right\} \text{を感じる} \Leftrightarrow \left\{ \begin{array}{l} \text{恐れ} \text{の} \text{感情} (\text{Gener}(X)) \\ \text{悲しい} (\text{Adjo}(X)) \text{ 符号} (\text{Gener}(X)) \end{array} \right\} \text{を感じる}$$

$$(1) \text{私は} \Lambda = \text{シリ} \times \text{を研究する} Y \Leftrightarrow \text{私は} \left\{ \begin{array}{l} \text{研究対象} (S_i(Y)) \\ \text{対象} (S_i(Y)) \end{array} \right\} \Lambda = \text{シリ} \times \text{を}$$

研究する (次節参照).

### 2.3 $S_i, \text{Adjo}$ と第 $i$ アクタントを連辞で結合する規則

$S_i, \text{Adjo}$  ( $i > 0$ ) はそれぞれ  $A$ -プジェクトの第  $i$  アクタントの典型的名称と典型的修飾語である。

$S_i$ :  $S_1$  (研究  $\times$ ) = 研究者, 研究の主体  $S_2$  (攻撃  $\times$ ) = 攻撃対象, 攻撃的  
 $S_3$  (教育  $\times$ ) = 教育対象, 被教育者, 生徒  $S_{cont}$  (要求  $\times$ ) = 要求内容, 要求  
 (=  $S_0$  (要求  $\times$ ))  $S_{result}$  (複写  $\times$ ) = 複写 (=  $S_0$ )  $S_i$  (注意  $\times$ ) = 注意  $\times$  虫

$X$  の第  $i$  ロールの典型的名称を導く関数を  $S_i$  と定義する。上例の「教育対象」に対し、形態上、 $S_i(X) = S_0(X) + S_i(X)$  が成り立つのに対し、「生徒」では  $S_0(X)$  と  $S_i(X)$  が形態的に分離できない融合形を成している。

$\text{Adjo}$ :  $\text{Adjo}_1$  (甘い  $\times$ ) = 甘い  $\text{Adjo}_2$  (憎い  $\times$ ) = 憎らしい  $\text{Adjo}_3$  (信頼  $\times$ ) = 信頼  $\times$  虫  
 $\text{Adjo}_4$  (始終愚痴  $\times$ ) = 愚痴  $\times$  虫  $\text{Adjo}_5$  (燃  $\times$ ) = 燃焼  $\times$  虫

英語の現在分詞と過去分詞は規則的な  $\text{Adjo}_1, \text{Adjo}_2$  の派生法である。

注意すべきは次のことである。

$S_i(X)$  は、 $X, S_0(X)$  と同一の「場面」を指すから、そのロール構造も同一と考える。しかし  $X$  と  $S_0(X)$  がそのロールをすべて表層の文の成分として実現するのにに対し、 $S_i(X)$  では、第  $i$  ロールだけが実現できない。例えば、「 $\Lambda = \text{シリ} \times$  を研究する」、「 $\Lambda = \text{シリ} \times$  の研究」に対し、同じ意味で「 $\Lambda = \text{シリ} \times$  の研究対象」とは言えない。規則 5 はこの実現できないロールを連辞を導く関数  $\text{Copl}_i$  を使って実現する。このとき、 $X$  または  $S_0(X)$  のロールを  $\text{Copl}_i$  で分割すると言う。なお、規則 6 を参照。

$S_i(X)$  と第  $i$  アクタント  $A_i$  とを表層で結合させるもう一つの規則は規則 4 である。 $\text{Gener}(X)$  が  $X$  に内在する上位概念であるのに、 $S_i(X)$  は、 $A_i$  が  $X$  のアクタントであるときに限り、 $A_i$  の上位概念である。その故、前節の規則 4、例 (1) が成り立つ。なお常に  $S_i(X) = \text{Gener}(S_i(X))$ 。

$$\text{規則 5 (a)} X \Leftrightarrow \overbrace{\text{Copl}_i(S_i(X)) + S_i(X)}^2$$

$$(b) X \Leftrightarrow \overbrace{\text{Copl}_i(\text{Adjo}_i(X)) + \text{Adjo}_i(X)}^2$$

$$(c) X \Leftrightarrow \text{Adjo}_i(X) \quad (\text{注: 日本語では形容詞は連辞を必要としない})$$

例 (1) 私  $\times$  は  $\Lambda = \text{シリ} \times$  を放射線  $\times$  で研究する

$\Leftrightarrow$  私  $\times$  は  $\Lambda = \text{シリ} \times$  の放射線  $\times$  での研究者 ( $S_1(X)$ ) である ( $\text{Copl}_1(S_1(X))$ )

$\Leftrightarrow$   $\Lambda = \text{シリ} \times$  は私  $\times$  の放射線  $\times$  での研究対象 ( $S_2(X)$ ) である ( $\text{Copl}_2(S_2(X))$ )

$$(b) \text{母}_1 \text{は息子}_2 \text{を} \left\{ \begin{array}{l} \text{甘やかす} \times \\ \text{憎む} \times \end{array} \right\} \Leftrightarrow \left\{ \begin{array}{l} \text{母}_1 \text{が息子}_2 \text{に甘い} (\text{Adjo}_1(X)) \\ \text{息子}_2 \text{が母}_1 \text{に憎らしい} (\text{Adjo}_2(X)) \end{array} \right.$$

(1) 校長<sub>1</sub>は彼が出勤すること<sub>2</sub>を要求したX ⇔ 彼が出勤すること<sub>2</sub>が校長の  
 { 要求内容 (Scout(X)) } であった (Coupl<sub>2</sub> (Scout(X))  
 { 要求 (Scout(X) = So(X)) }

2.4 Oper, Labor, Func と So による言い替え規則

Oper は So(X) を第一目的, 第二アクタントを主語とし, Labor は So(X) を第二目的, 第二, 第三アクタントを, 夫々, 主語, 第一目的とし, Func は So(X) を主語とする動詞, 但しそれ自身の意味は無いが, 希薄である動詞を導く関数である。赤字で指定されたものは連語の随意成分となる。これらの連語は我々が文章を書くに当り最も多く使うものであり, それが慣用句的であるので, 外国語の学習の翻訳を難しくしているものである。

Oper<sub>1</sub> (研究) = 行<sub>ル</sub>, スル Oper<sub>1</sub> (吐き) = 感<sub>シ</sub>ル, 賞<sub>ス</sub>ル  
 Oper<sub>2</sub> (抵抗) = 受<sub>ル</sub>, 遭<sub>ウ</sub> Oper<sub>2</sub> (尊敬) = 受<sub>ル</sub>, 得<sub>ル</sub> Oper<sub>1</sub> (影響) = 及<sub>ボ</sub>ス, 与<sub>ス</sub>ル  
 Labor<sub>12</sub> (検査) = 加<sub>ス</sub>ル, 付<sub>ス</sub>ル Labor<sub>12</sub> (考慮) = 入<sub>ル</sub> Labor (制御) = ~ (1)ヲ=オ<sub>ク</sub>  
 Func<sub>0</sub> (酸化) = 起<sub>ル</sub> Func<sub>2</sub> (命令) = 出<sub>ル</sub>

英語の例: Oper<sub>1</sub> (visit) = pay Oper<sub>1</sub> (error) = commit Oper<sub>2</sub> (application) = find  
 Oper<sub>2</sub> (change) = undergo Labor<sub>1</sub> (execution) = put (into) Labor<sub>1</sub> (terror) = hold in  
 Func<sub>0</sub> (event) = occur Func<sub>1</sub> (power) = rest (with) Func<sub>2</sub> (awe and terror) = frighten

「信号」の意味の signal<sub>123</sub> の例: Oper<sub>1</sub> = send out Oper<sub>13</sub> = send, transmit, feed  
 Oper<sub>2</sub> = receive Func<sub>3</sub> = go to

その他次のような動詞が掲げられる。

一 座述語 起<sub>ル</sub> 行<sub>ル</sub> 生<sub>ス</sub>ル 出<sub>ル</sub> 下<sub>ル</sub>  
 二 座述語 スル 行<sub>ウ</sub> 感<sub>シ</sub>ル 賞<sub>ス</sub>ル 経験<sub>ス</sub>ル 遭<sub>ウ</sub> 面<sub>ス</sub>ル 経<sub>ル</sub> 下<sub>ル</sub> 犯<sub>ス</sub> 違<sub>ス</sub>ル  
 ト<sub>ル</sub> 及<sub>ボ</sub>ス 示<sub>ス</sub> 違<sub>ス</sub>ル 向<sub>ク</sub> 向<sub>ク</sub> 出<sub>ル</sub>  
 三 座述語 与<sub>ス</sub>ル 及<sub>ボ</sub>ス 加<sub>ス</sub>ル 下<sub>ス</sub> 掛<sub>ク</sub> 向<sub>ク</sub> (ト)スル (=)カ<sub>ル</sub> 付<sub>ス</sub>ル 出<sub>ル</sub> 下<sub>ル</sub> 受<sub>ル</sub>

上述の動詞は, 一言では, 連語の中で本来の意味が失われ, 構文上の支配の強さが弱まり, 他は, 本来の動詞のように, So(X) を主語とする受身をつくることも, So(X) との間に従属成分を分割することもできる。

規則 6 は Oper, Labor, Func によりアーギュメントの D-ルの分割を行う規則である。

規則 6 (a)  $X \Leftrightarrow \text{Oper}_i(\overbrace{\text{So}(X)}^2) + \text{So}(X)$   
 (b)  $X \Leftrightarrow \text{Labor}_{ij}(\overbrace{\text{So}(X)}^3) + \text{So}(X)$   
 (c)  $X \Leftrightarrow \text{Func}(i)(\overbrace{\text{So}(X)}^2) + \text{So}(X)$

例 1 彼<sub>1</sub>は宝石<sub>2</sub>を X 線<sub>3</sub>で検査する X

- (1) ⇔ 彼<sub>1</sub>は宝石<sub>2</sub> { を } X 線<sub>3</sub> { で } 検査 (So(X)) を行う (Oper<sub>1</sub>(So(X)))  
 (2) ⇔ 宝石<sub>2</sub>は彼<sub>1</sub> { により } X 線<sub>3</sub> { で } 検査 (So(X)) を受ける (Oper<sub>2</sub>(So(X)))  
 (3) ⇔ 彼<sub>1</sub>は宝石<sub>2</sub>を X 線<sub>3</sub> { で } 検査 (So(X)) にかける (Labor<sub>12</sub>(So(X)))

例 2 温度上昇<sub>1</sub>が物価<sub>2</sub>に影響する X

(1)  $\Leftrightarrow$  温度上昇<sub>の</sub>により<sub>の</sub> 物価<sub>2</sub>に影響 (So(X)) が<sub>の</sub> {B<sub>2</sub>} (Func<sub>2</sub>(So(X)))  
出る

(2)  $\Leftrightarrow$  温度上昇<sub>の</sub>により<sub>の</sub> 物価<sub>1</sub>への影響 (So(X)) が<sub>の</sub> {生じる} (Func<sub>0</sub>(So(X)))  
出る

(2)の「生じる」がニ座述語の場合は(1)に当る。

## 2.5 Oper, Labor, Funcの間のコンバージョン変形

前節の例からわかるように、次の交替規則が成り立つ。

- 規則7 (a) Oper<sub>1</sub>  $\Leftrightarrow$  Func<sub>1</sub> 1がイニシアチブを示す  $\Leftrightarrow$  イニシアチブが1から出る  
 (b) Oper<sub>2</sub>  $\Leftrightarrow$  Func<sub>2</sub> 2が命令を1から受ける  $\Leftrightarrow$  命令が2に1から出る  
 (c) Oper<sub>1</sub>  $\Leftrightarrow$  Oper<sub>2</sub> 1が命令を2に下す  $\Leftrightarrow$  2が命令を1から受ける  
 (d) Oper<sub>1</sub>  $\Leftrightarrow$  Labor<sub>12</sub> 1が制御を2に加える  $\Leftrightarrow$  1が2を制御下におく

## 2.6 Oper, Labor, FuncとSiからなる言い替え規則

規則8は規則6におけるSo(X)をSi(X)としたものである。以下例のみを示す。通常、CoupleとはSiの方がよく結合し、他方、Oper, Labor, FuncとはSoの方がよく結合する傾向がある。特にSiはOperと結合する例が少ない。

例1 A<sub>1</sub>が文献<sub>2</sub>を複写するx

$\Leftrightarrow$  A<sub>1</sub>が文献<sub>の</sub> {<sub>から</sub>  
について} 複写 (Sres(X)=So(X)) をとる (Oper<sub>1</sub>(Sres(X)))

例2 (1) A<sub>1</sub>が宝石<sub>2</sub>をX線<sub>4</sub>で研究するx

$\Leftrightarrow$  A<sub>1</sub>がX線<sub>の</sub> {<sub>を</sub>  
について} 研究手段 (S<sub>4</sub>(X)) とする (Labor<sub>14</sub>(S<sub>4</sub>(X)))

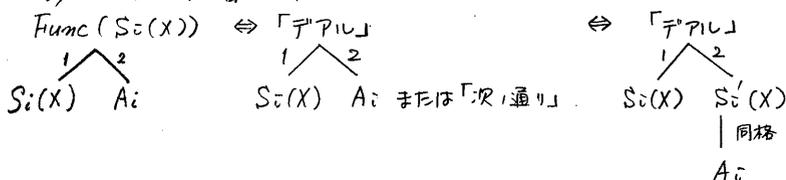
(2) 海を標本 (Sloc(標本)) とする

「Siとする」の構文は学術論文中にしばしば見出される。後述するように、「Siとする」、例えば、「道具とする」も同様である。動詞「(と)する」は本来<対象>の役割を指定する動詞である。

Func<sub>2</sub>の例を関数名を省いて示す。

例3	Si	Ai	Func <sub>2</sub> (Si)
研究対象 / 研究 (So)			(に) ついて である
研究内容			(に) ある (に) 関する (に) ついて である
研究理由			(に) 由る
研究の根拠			(に) 基づく 依る
研究の動機			(に) ある (に) 発する (から) 出る
研究方法			(に) よる (〜という) 方法で
研究範囲			(に) 及び
飛行行程は	日本海を		通る 過ぎる (に) 及び
飛行目標			(に) 終る 向う
飛行の出発点			(から) 始まる (から) 出る
探掘量			(に) 達する (を) 示す (〜する) 量で
支払期間			(に) 達する (に) 及び (〜する) 間で
宿泊所			(に) ある (に) 位置する

なお連綴を Func の値として許せば「テイル」「次、通り」はすべてのアーギュメントに適用できる。また例えば、「研究方法 (S<sub>i</sub>(研究する)) はエーテルで砕きつつ粉碎するという方法 (= S<sub>i</sub>'(研究する) = Gener(研究方法))」がからわかるように、典型的なアクタント名 S<sub>i</sub> に対しアクタントの担うロール名の典型的名称 S<sub>i</sub>' は上位概念であるから、次の図の交替が成り立つ。



以上掲げた例には、本稿で省いた関数を使わないので、意味の記述の不十分な例や、同義或は日本語らしさの観点から坐りの良くない例も問題提起のため示した。また、関数 Adj<sub>i</sub> については種々の問題が残っている。

### 3. 文とロールの明示

等者は格助詞の使用を極端に制限し、前節で述べたようなロールやアクタントの典型的名称を使った文を書くことを試み、このような文からなる下位言語を、計算機による解析し易さと人間の理解し易さの二つの基準で分類することを始めたばかりである。本稿では二、三の問題を簡単に述べる。

#### 3.1 添字つき格助詞

格助詞にロールを明示する添字をつける。同様に格助詞相当句と呼ばれるものにも添字をつける。

#### 3.2 ロール名を添えた格助詞

##### 3.2.1 A<sub>i</sub> + S<sub>i</sub>/S<sub>i</sub>' + 格助詞 (規則4参照)

例 入手し易いという理由で 500円代償で X線解析法という方法で  
ニコタンという合成材料で 分析的な立場で

##### 3.2.2 「次、」 + S<sub>i</sub>/S<sub>i</sub>' + 格助詞

例 次の二つの材料から 次の出発点から 次に述べる i), ii) の原因から  
次の対象の研究 次の研究者の研究

##### 3.2.3 S<sub>i</sub>/S<sub>i</sub>' + A<sub>i</sub> + 格助詞

例 研究対象ペニシリンを 旅行 { 行程 } 東海道自然歩道を  
コ-2

研究対象ペニシリンの研究 研究者山本技官の研究

#### 3.3 ロール名表示述語

以下述語が構成する連綴の中の義務的な格助詞には下線を付して示す。

##### 3.3.1 A<sub>i</sub> + S<sub>i</sub>/S<sub>i</sub>' + Coupl

例 X線解析法が原因で、検査に失敗する

##### 3.3.2 A<sub>i</sub> + S<sub>i</sub>/S<sub>i</sub>' + Labor/ Oper

例 A<sub>i</sub>を目的として A<sub>i</sub>を研究対象として 統計学の立場をとり  
理論的観点に立ち



- 3) 岡本哲也:『教理科学』, NO.6 (1977)
- 4) 石綿敏雄:『計量国語学』, 13卷5号, pp 222-226 (1982)